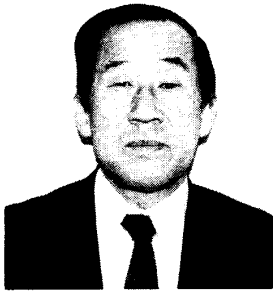


服 部 賞

日新製鋼(株)専務取締役
堺製造所長

土 居 浩 一 君

ステンレス鋼板および表面処理鋼板の生産技術の進歩発展



君は昭和22年多賀工業専門学校金属科卒業、同年徳山鉄板(株)入社、合併により日新製鋼(株)となり、周南製鋼所冶金管理課長、本社技術課長、周南第二製造部長、生産管理部長、呉製鉄所庄延部長、阪神製造所副所長を歴任し、昭和51年取締役に就任、54年常務取締役阪神製造所長、56年同本社技術管理部長、60年専務取締役、同年同阪神製造所長(62年堺製造所に改称)に就任現在に至っている。

君はステンレス鋼板および表面処理鋼板の生産技術の進歩発展に顕著な貢献をした。主な業績は次のとおりである。

1. ステンレス鋼板の一貫大量生産体制の確立

周南における国内初のステンレス鋼板一貫生産工場の建設にあたり、昭和31年より計画に参画し電気炉、焼鈍酸洗ライン等の建設と操業ならびに操業条件の標準化推進の中心的役割を果たした。さらに昭和44年から、ステンレス生産工程の新プロセス推進に当たって、LD-VAC製鋼法、連続铸造、タンデムセンジミアミル等ステンレス製造工程における飛躍的な技術進歩に指導的役割を果たし、ステンレス鋼の生産性向上、品質向上、原単位低減等の多大の成果を挙げた。

2. 表面処理鋼板の技術開発

日新製鋼は、溶融めっきの付着量制御として昭和40年ガスワイピング法による制御法を開発したが、昭和39年から44年の本社在任の間本法の開発、操業定安定推進に中心的役割を果たした。本法はその成果により、昭和42年大河内記念生産賞を受賞した。また、昭和50年阪神製造所に転じてから、当時開発期にあった溶融アルミめっき鋼板に関する技術改善にとり組み、量産化を図り、昭和51年には本邦初のアルミめっき専用ラインとするまでに発展させた。また世界でも類を見ない広幅連続銅めっき鋼板の製造技術の開発及び量産化を成功せしめた。銅めっきに関する成果も昭和53年大河内記念生産賞を受賞した。その後昭和54年と57年に相次いで阪神製造所内に溶融めっきラインを建設し、高速でのめっき技術を確立した。更に昭和60年には画期的なめっき方式である真空蒸着亜鉛めっき設備を工業設備として完成させ、昭和62年営業ベースの生産を開始するまでに技術の改善を推進した。

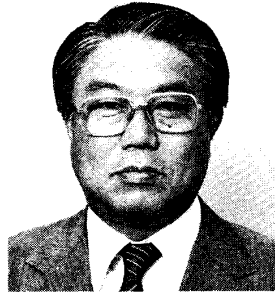
また、塗装鋼板の分野では需要家における塗装工程を省略できるプレコート鋼板の製造確立に多大の貢献をした。

服 部 賞

日本鋼管(株)代表取締役副社長

羽 鳥 幸 男 君

近代的一貫製鉄所の運営、操業技術確立への貢献



君は昭和22年9月東京大学工学部機械工学科卒業後、26年日本鋼管(株)に入社し、主として厚板の製造に従事し、37年以降課長、次長として本社技術部技術開発室に在職、45年京浜製鉄所厚板製造部技術工程部長、技術管理部長、本社経営企画室部長を歴任し50年福山製鉄所副所長に就任した。その後製鉄エンジニアリング部長、55年取締役設備部長、56年技術研究所長、57年エジプトディケーラ・プロジェクトを担当し、59年常務取締役京浜製鉄所長、60年同専務取締役を経て61年代表取締役副社長(鉄鋼事業部長)に就任した。

この間、君の主な業績は次のとおりである。

1. 近代的一貫製鉄所の運営と操業

30年代末から40年代初めにかけて本社技術部の責任者として、生産活動製造効率を抜本的に合理化することを企画し、京浜地区の旧三製鉄所を統合し43年京浜製鉄所発足に結びつけるなど運営の近代化に貢献した。その後、50年から53年の間は福山製鉄所副所長として、製造の効率化、品質の安定ならびに製品の高付加価値を徹底的に追求し、同所を世界最大の生産規模を誇る近代的製鉄所に発展させた。さらに59年から2年間は扇島を含む新生京浜製鉄所の所長として、一層の合理化ならびに品質要求の多様化に対応せる製造体制の確立など、低経済成長下における一貫製鉄所の効率的運営に幾多の手腕を発揮した。

2. 製鉄技術の進歩発展

技術研究所、製鉄所および事業部の最高責任者として原価低減、品質の安定、高付加価値製品の開発などを目的とした諸研究を直接指導するとともに研究の効率化に必要な諸対策を積極的に推進し、幾多の新技术・新製品を開発した。この主なものは次のとおりである。

a) 連続铸造鋼の品質向上ならびに安定化を目的としたモールド湯面レベル制御技術

b) 厚鋼板製造のためのオンライン加速冷却設備と操業技術

c) 冷延鋼板製造のための連続焼鈍設備および操業技術

3. 世界鉄鋼業への技術協力

製鉄エンジニアリング部長として日本で育まれた多くの技術を後進諸国は勿論、先進諸国に対しても積極的に技術協力した。また世銀融資によるエジプト・ディケーラプロジェクトに際しては57年から2年半、初代の日本側最高責任者として直接現地で指導に当り、困難な環境にありながらスケジュール通り建設を推進し、国内外から注目される功績を示した。